

幼児期から学童期への移行期における 親の子育て状況と不安、支援ニーズ

—「第4回愛知の子ども縦断調査」結果第1報—

神田直子 山本理絵

1. 愛知の子ども縦断調査について

著者らは、2001年より同一の対象者に4回の調査を行ってきた。その主な目的は、乳幼児を持つ母親¹⁾の子育ての状況・子育て不安・支援ニーズと、子どもの個性、家庭の状況、親族・地域・支援機関などのサポートリソース状況、母親のジェンダー意識などとの関連を分析し、特に子育て困難な条件を明らかにし、そのことによって子育て支援のための提言をおこなうことであった。

2008年には5回目の調査を予定しており、縦断的な視点から分析することが可能になってきているため、これら一連の調査を「愛知の子ども縦断調査」と名づけることにした。それぞれの調査の概要は次の通りであるが、詳しくはそれぞれの調査をもとに分析した論文を参照されたい²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

<第1回 2001年調査>

愛知県内12カ所の保健センターの乳幼児健康診査（1歳半、3歳）受診者等の親2,519名に質問調査用紙配布を行った（配布は保健センターに依頼、回答は回答者個別の郵送による）。回答数は1,457、回答率は57.8%、調査時期は、2001年2月であった。回答者は、母親が98.9%であり、30代62.7%、20代34.1%であった。調査内容は、子育て困難に関わる子どもの特徴、親の育児不安・支援ニーズ、父親の育児参加状況、地域での人的つながり、支援事業への参加、テレビや公園遊びなどの子どもの生活状況などである。

<第2回 2002年調査>

2001年調査の回答者のうち、継続調査に同意した人の中から1000人を抽出し、調査対象として、郵送により質問紙調査を行った。研究費用の関係で調査対象人数を絞った。主な対象の子どもの年齢は、2歳半と4歳となった。回答集は836、回答率は83.6%、調査時期は2002年3月であった。調査内容は第1回

調査とほぼ同様である。

<第3回 2004年調査>

2001年調査の回答者のうち、継続調査協力に同意した人1,115人を対象者とし、郵送により質問紙調査を行った。主な対象の子どもの年齢は、4歳半と6歳となった。回答数は925、有効回答は907、回答率は83.0%、調査時期は、2004年2月であった。調査内容は、01年調査項目の一部を年齢進行に応じて変更・拡大したほか、親のジェンダー観、保育園・幼稚園の保育者からの子どもの園での様子についての指摘内容、子どもの発達状況、親の就労状況・希望などである。

<第4回2007年調査>

2004年調査の回答者のうち、継続調査協力に同意した人710人を対象とし、郵送により質問紙調査を行った。回答数は626、回答率は88.2%、調査時期は、2007年3月であった。この調査では対象となる子どもたちは主に小学校1年生と3年生となったため、それに応じて質問内容も従来のもの変更・発展させ小学生にふさわしいものとしている。

「育児不安」の内容を年齢に応じて、「子育て不安」とし、さらに「罪障感」⁸⁾「学校に関する不安」を取り上げた。子どもの個人的特徴、育てにくさについては、軽度発達障害（広汎性発達障害、学習障害）に関する質問項目、子どもの情緒と行動の問題を包括的に評価するCBCL（幼児の行動チェックリスト）⁹⁾の一部を取り上げた。

また「子育て支援ニーズ」だけでなく、学校への参加のしかたや学校に対する要望も取り上げ、具体的な内容について自由記述を多用し尋ねた。

本研究では紙幅の関係から、主にこれらの質問項目のうち、子育て不安、学校に関する不安、軽度発達障害につながる特徴、子育て支援ニーズ、学校への参加のしかたについての学年別単純集計結果(クロス集計)を報告し、今後分析すべき点について、課題として提起したい。

2. 方法

(1) 分析対象者

本研究で分析対象となったのは上記第4回目調査回答者626人のうち、子どもが1、2、3年生である親612人である。残り14人は「4年生以上」と回答しており、第1回目調査時点で3歳児健診後のフォローアップグループ参加者の他、第1回の調査対象児の兄姉などについて答えている誤記の可能性があるため、分析から除外することとした。

分析対象者の属性は表1の通りである

表1 分析対象者の属性

| | | 小学校1年 | 小学校2年 | 小学校3年 | 合計 |
|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 回答者 | | 284(46.4) | 33(5.4) | 295(48.2) | 612(100.0) |
| 母親・家族 の状況 | 専業主婦 | 107(37.7) | 9(27.3) | 110(37.3) | 226(36.9) |
| | 母親の就業状況 | | | | |
| | 正規雇用 | 21(7.4) | 3(9.1) | 22(7.5) | 46(7.5) |
| | パート等 | 125(44.0) | 19(57.6) | 131(44.4) | 275(44.9) |
| | 自営 | 18(6.3) | 1(3.0) | 18(6.1) | 37(6.0) |
| | 配偶者有 | | | | |
| | 有 | 267(94.3) | 32(97.0) | 284(96.3) | 583(95.4) |
| | 無 | 16(5.7) | 1(3.0) | 11(3.7) | 88(4.6) |
| | 祖父母同居 | | | | |
| | 有 | 68(23.9) | 11(33.3) | 87(29.6) | 166(27.2) |
| 無 | 216(76.1) | 22(66.7) | 207(70.4) | 445(72.8) | |
| 家庭の年収 (税込み) | 200万円未満 | 8(3.1) | 0(0.0) | 7(2.6) | 15(2.7) |
| | 400万円未満 | 47(18.4) | 10(31.3) | 32(11.9) | 89(16.0) |
| | 600万円未満 | 99(38.7) | 8(25.0) | 87(32.5) | 194(34.9) |
| | 800万円未満 | 69(27.0) | 10(31.3) | 68(25.4) | 147(26.4) |
| | 800万円以上 | 33(12.9) | 4(12.5) | 74(27.6) | 111(20.0) |
| 子どもの状 況 | 子どもの性別 | | | | |
| | 男 | 147(51.8) | 21(63.6) | 134(45.4) | 302(49.3) |
| | 女 | 137(48.2) | 12(36.4) | 161(54.6) | 310(50.7) |
| | 子どもの放課後 | | | | |
| | 家 | 177(62.5) | 17(53.1) | 219(74.2) | 413(67.6) |
| | 学童保育所 | 52(18.4) | 6(18.8) | 26(8.8) | 84(13.8) |
| | きょうだい | | | | |
| | 有 | 248(87.3) | 27(81.8) | 263(89.2) | 538(87.9) |
| 無 | 36(12.7) | 6(18.2) | 32(10.8) | 74(12.1) | |
| 子どもの持病・障害 | | | | | |
| 有 | 34(12.1) | 9(28.1) | 20(6.9) | 63(10.4) | |
| 無 | 248(87.9) | 23(71.9) | 271(93.1) | 542(89.6) | |

全体として母親の就業状況はパート就業が4割強、専業主婦が3割強で、正規雇用は1割に満たない。配偶者のいない人は5%弱。年収は400万円から800万円未満の人が6割を占める。子どもは一人っ子は1割強、学童保育に通っているのは2割近くである。

2年生は、1、3年生に比べ全体の人数が少ないが、これは2001年時点で2歳台であった子どもたちであり、「1歳半健診で何らかの問題がありフォロー

アップグループに参加していた」経験を持つ子どもが多い。何らかの持病や障害を持っているのは、2年生は3割近くと非常に多いが、1、3年はそれにくらべずっと少ない。また、そのような障害等が判明した年齢は2年生の場合、2歳が63%、3歳が25%であり、かなり小さいときから判明している。

表2 子育て不安因子分析結果

| 質問項目 | | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|-----------------------------|---|--------|--------|--------|
| 子育て生活満足感の なさ | 自分は子育てに向いていると思う★ | 0.685 | -0.026 | 0.05 | -0.063 |
| | 子どもを育てるのは楽しい★ | 0.682 | -0.024 | 0.035 | -0.052 |
| | 自分は子どもをうまく育てていると 思う★ | 0.587 | 0.113 | 0.075 | -0.089 |
| | 育児によって自分が成長していると 感じられる★ | 0.583 | -0.039 | 0.003 | -0.032 |
| | 一日が充実して、ハツラツとしてい る★ | 0.528 | -0.04 | -0.104 | 0.277 |
| | (私は)気分転換するのが上手なほ うである★ | 0.368 | 0.019 | -0.092 | 0.272 |
| | 子育て・子への不安 | 私には手におえない子である この子のためにいろいろなことをし ても、この子に私の気持ちがほとん ど通じていないように思う | 0.049 | 0.795 | -0.077 |
| この子が将来何か問題を起こすので はないかと子育てに不安になる | | -0.009 | 0.611 | 0.059 | -0.005 |
| 子どものことでどうしたらよいか分 からなくなることがある | | -0.065 | 0.544 | 0.056 | 0.104 |
| この子の育児について「もっとこう するべき」とまわりの人から言われ る | | -0.083 | 0.476 | 0.078 | 0.042 |
| 子への否定的感情 | | 子どもをついたたいてしまうことが ある | -0.01 | -0.069 | 0.73 |
| | 子どもを、とめどなく叱ったり叩い たりする | 0.031 | 0.128 | 0.62 | -0.003 |
| | 子どもがわずらわしくてイライラし てしまう | 0.095 | 0.115 | 0.372 | 0.097 |
| 心身の疲れ | 考え事がおっくうで、嫌になるとき がある | -0.066 | 0.046 | 0.041 | 0.788 |
| | 身体の疲れが取れず、いつも疲れて いる感じがする | -0.007 | 0.008 | 0.031 | 0.566 |
| Cronbachの α 係数 | | 0.764 | 0.771 | 0.667 | 0.650 |

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

(2) 分析対象とした質問内容

①子育て不安

子育て不安は幼児期に尋ねていた項目を大きく見直し、学童期にふさわしくないものを削除し、特に軽度発達障害関連の親の持つ不安項目を追加した¹⁰⁾。具体的な質問項目は表2（これ以外に9-6「自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感をかんじてしまう」はいずれの因子にも負荷量が0.35以下であったので分析から除いた)のとおりである。回答は「まったくない」から「よくある」の4択式でそれぞれ1点から4点を配点（★は逆転項目）した。点数が高いほど子育て不安が高いことを示す。

②学校関連不安

学校関係についての親の不安について、筆者らの共同研究者の小淵隆司氏の長年の臨床経験¹¹⁾にもとづき、親の持つ不安についての質問項目の提起があり、筆者らと精査し、自由記述と選択肢方式で尋ねる形式にした。前者の質問内容は、表3のとおりである。選択肢は「そう思わない」から「そう思う」の4択式でそれぞれ1点から4点を配点した。点数が高いほど学校関連不安が高いことを示す。

表3 学校関連不安

| 質問項目 | | 1 | 2 |
|------------------|--------------------------------|--------|--------|
| 友達関連不安 | 子どもに友達ができないのではないかと心配 | 0.861 | -0.098 |
| | 子どもが集団活動に参加できないのではないかと心配 | 0.852 | -0.003 |
| | 子どもが学校に通うのを嫌がるのではないかと不安 | 0.691 | 0.024 |
| | 子どもが友達にいじめられるのではないかと心配 | 0.653 | 0.137 |
| 教師・学習関連不安 | 授業参観や保護者会に親が出るのが大変だと思う | -0.122 | 0.763 |
| | 自分自身が他の子のお母さんと親しくなれないのではないかと不安 | 0.046 | 0.650 |
| | 先生にしつけの悪い子と思われるのではないかと不安 | 0.157 | 0.493 |
| | 子どもが学校の勉強についていけないのではないかと心配 | 0.262 | 0.306 |
| Cronbach のアルファ係数 | | 0.851 | 0.685 |

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

③小学校入学時の子どもの変化や親の感想

上記②と同様、小淵氏の臨床経験にもとづき、特に軽度発達障害など子育て困難な子どもを持つ親が持つことの多い、幼児期から小学校移行の時期に感じる子どもの変化の実感や不安などについて、自由記述と選択肢方式で、尋ねる質問項目とした。今回の分析対象としたのは表6、7のとおりである。入学前の予想との違いについては「1、かなりちがっていた」「2、だいたい同じだった」という選択肢であった。

④学校への参加、家庭学習の状況

親の学校行事への参加や子どもの学習への援助状況および、その時の親の感想について尋ねた懇談会、宿題の援助、塾やお稽古事への参加について前記と同様、自由記述と選択肢方式によって尋ねた。今回の分析対象とした質問項目は、表10から表12のとおりである。

⑤心配ごとについての相談状況、相談相手

上記③と同様の手法で質問項目を作成した。今回の分析対象とした質問項目は、表13から表16のとおりである。

⑥子育て支援ニーズ

第1回目から3回目までの「愛知の子ども縦断調査」と同一の質問項目から、学童期にふさわしくないものを一部除外し、あらたに「学校での様子をもっと知らせてほしい」を付け加えた。回答はこれまで同様の「必要ない」から「とても必要とする」の4択方式で、それぞれ1点から4点を配点した。

⑦広汎性発達障害、学習障害に関する項目

広汎性発達障害（PDD）、学習障害（LD）に関する質問項目については、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目から抽出した¹²⁾。広汎性発達障害に関する質問項目については、スウェーデンの研究者によって作成された高機能自閉症に関するスクリーニング質問紙（ASSQ）を参考にして作成されたという質問項目<「対人関係やこだわり等」>27項目から9項目を抽出した（表18）。文部科学省の実態調査では、通常学級に在籍する、高機能自閉症の傾向がある子どもの把握するためにこの質問項目が使用されているが、本調査の対象

児には、2、3歳の時期に診断を受けた自閉症の子どもも含まれており、(精神遅滞を伴う)自閉症及び高機能自閉症を含む広汎性発達障害に関する質問項目として<「対人関係やこだわり等」>の質問項目を用いた。そこから9項目を選ぶさいに、文部科学省の調査項目から7項目選択している高浜市の2005年度版チェック表を参考にした。回答も、文部科学省の評点にあわせて、いいえ-0、多少-1、はい-2とし、点数化した。

LDに関する質問項目については、聴く、話す、読む、各、計算する、推論するの6領域各5項目の中から、対象児が1～3年生であることと親が判断して回答することを考慮して、1項目ずつ選んだ(表19)。そのさい、文部科学省の調査項目の各領域から1～2項目ずつ選択している高浜市の2005年度版チェック表を参考にした。回答は文部科学省の評点に合わせて、ない-0、まれにある-1、ときどきある-2、よくある-3とし、点数化した。

3. 結果

今回は、上記の分析対象とした質問項目について、全体としての傾向を示すため、学年別のクロス集計表や平均値の比較を示す。有意差検定は1年と3年の間についてのみ行う。2年生を除くのは、前記のように2年生は特殊なグループであり、人数も少ないからである。

(1) 子育て不安

この時期の子育て不安の構造を明らかにするために、全項目に対する回答者の評定値に基づいて因子分析を行った。因子付加量が0.35に満たない項目を削除し、初回の因子分析(主因子法、回転なし)で、個有値がほぼ1で、累積寄与率が50%を超えるポイントを指標とし、解釈可能性の面も考慮した結果4因子構造が見出された。それぞれ、「子育て生活満足感のなさ」、「子育て・子への不安」、「子への否定的感情」、「心身の疲れ」と命名した(表2)。Cronbachの α 係数はそれぞれ0.764、0.771、0.667、0.650と0.7前後でありほぼ満足できるレベルで内的整合性があると考えられる。

それぞれの因子を下位尺度とし、下位尺度の合計得点を学年ごとにその平均値比較を示したものが表4である。

表4 学年別子育て不安、学校関連不安

| | 学年 | N | 平均値 | 標準偏差 | 1年と3年の有意差 |
|----------------|-------|-----|-------|------|-----------|
| 子育て満足感のなさ | 小学校1年 | 279 | 12.58 | 3.00 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 32 | 13.50 | 3.55 | |
| | 小学校3年 | 290 | 12.78 | 2.77 | |
| 子育て・子への不安 | 小学校2年 | 283 | 9.71 | 2.68 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 32 | 10.75 | 2.95 | |
| | 小学校3年 | 293 | 9.83 | 2.73 | |
| 子どもへの否定的感情 | 小学校1年 | 282 | 7.05 | 1.70 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 33 | 7.33 | 1.55 | |
| | 小学校3年 | 293 | 6.87 | 1.78 | |
| 心身の疲れ | 小学校1年 | 283 | 4.61 | 1.40 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 33 | 4.67 | 1.31 | |
| | 小学校3年 | 294 | 4.65 | 1.42 | |
| 学校の友達関係の不安 | 小学校1年 | 281 | 6.98 | 2.84 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 33 | 8.39 | 3.44 | |
| | 小学校3年 | 291 | 6.67 | 2.80 | |
| 教師・学習・学校行事への不安 | 小学校1年 | 280 | 7.36 | 2.52 |] n.s. |
| | 小学校2年 | 33 | 8.24 | 2.08 | |
| | 小学校3年 | 292 | 7.46 | 2.45 | |

いずれも1年生と3年生の間に有意差はなかった。1年生と3年生の間では、子育て不安に関しては、下位尺度別に見ても大きな違いはないと考えられる。

(2) 学校関連不安

この時期の学校関連の構造を明らかにするために、全項目に対する回答者の評定値に基づいて因子分析を行った。上記と同様の手続きで因子数を決めた。「子どもが学校の勉強についていけないのではないかと心配」は2つの因子に関連し、因子負荷量がいずれにも、0.35以下である。しかし、0.3は超えており、学校の勉強関連ではこの質問項目だけであるので、除外はしないこととした。

それぞれの因子を下位尺度とし、下位尺度の合計得点を学年ごとにその平均値比較を示したものが表4である。

いずれも1年生と3年生の間で有意差はなかった。1年生と3年生の間では、学校関連不安に関しては、下位尺度別に見ても大きな違いはないと考えられる。

しかし、この質問は対象児が小学生となった今回はじめて取り上げた質問項

目であるので、さらに細かく項目別に見てみたが、どの項目でも有意差はなかった（表5）。

表5 学校生活についての不安・心配
（「ややそう思う」「そう思う」）

| 質問項目 | 人 (%) | | | |
|------------------------------|-----------|-----------|-----------|---------------|
| | 小学校 1年 | 小学校 2年 | 小学校 3年 | 1年と3年 の有意差 |
| 子どもに友達ができないのではないかと心配 | 58(20.6) | 13(39.4) | 50(17.2) | * |
| 子どもが集団活動に参加できないのではないかと心配 | 42(14.9) | 9(27.3) | 33(11.3) | * |
| 子どもが学校に通うのを嫌がるのではないかと不安 | 39(13.8) | 6(18.2) | 84(13.3) | n.s. |
| 子どもが友達にいじめられるのではないかと心配 | 91(32.4) | 17(51.5) | 89(30.6) | n.s. |
| 自分自身が他のお母さんと親しくなれないのではないかと不安 | 81(29.0) | 9(27.3) | 68(23.3) | n.s. |
| 授業参観や保護者会に親が出るのが大変だと思う | 52(18.5) | 7(21.2) | 74(25.3) | n.s. |
| 先生にしつけの悪い子と思われるのではないかと心配 | 34(12.1) | 7(21.2) | 35(12.0) | n.s. |
| 子どもが学校の勉強についていけないのではないかと心配 | 90(32.0) | 17(51.5) | 94(32.1) | * |

* : P < .05

(3) 入学前後の変化、予想と違っていたか

「入学して成長したか」に対しては9割前後の人が「はい」と答えている。あらためて、小学校入学が子どもにとっての発達の節目であることがうかがえる（表6）。

表6 入学して成長したか

| | 人 (%) | | | | 1年と3年の 有意差 |
|-------|-----------|---------------|--------|------------|---------------|
| | はい | どちらとも いえない | いいえ | 合計 | |
| 小学校1年 | 254(90.1) | 26(9.9) | 0(0.0) | 120(100.0) | n.s. |
| 小学校2年 | 29(87.9) | 4(12.1) | 0(0.1) | 33(100.0) | |
| 小学校3年 | 268(90.8) | 27(9.2) | 0(0.0) | 216(100.0) | |

親の方の「入学前の予想との違い」については、「かなり違っていた」とするのは、勉強面では1割台、保護者同士の関係では1割弱であるが、「先生の対応」がほぼ2割台で3つのうちでは一番高く、特に2年生の場合3割近くとなっているのが注目される（表7）。

表7 入学前の予想との違い（「かなり違っていた」） 人（%）

| | 小学校1年 | 小学校2年 | 小学校3年 | 1年と3年の有意差 |
|-----------|----------|----------|----------|-----------|
| 勉強面 | 51(18.4) | 10(31.3) | 41(14.1) | n.s. |
| 先生への対応 | 63(22.6) | 9(28.1) | 56(19.3) | n.s. |
| 保護者どうしの関係 | 27(9.7) | 3(9.4) | 22(7.5) | n.s. |

(4) 学校への参加、家庭学習の状況

学校の懇談会参加は、1年生と3年生では0.1%水準で有意差があり（ $\chi^2(2)=20.47$ ）1年生は4分の3が「いつも出席」と答えているのに対し、3年生では半数強に減少する（表8）。また、「懇談会は有意義か」という質問に対しては、1年生と3年生では5%水準で有意差があり（ $\chi^2(1)=4.36$ ）、やはり1年生の方が有意義であると応えている人が多い（表9）。

表8 学校の懇談会参加 人（%）

| | いつも | 時々 | ない | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|----------|----------|-----------|
| 小学校1年 | 205(73.5) | 45(16.1) | 29(10.4) | *** |
| 小学校2年 | 26(78.8) | 5(15.2) | 2(6.1) | |
| 小学校3年 | 163(56.0) | 89(30.6) | 39(13.4) | |

***：P<.001

表9 懇談会は有意義か 人（%）

| | 有意義 | あまり有意義ではない | 合計 | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|------------|------------|-----------|
| 小学校1年 | 164(66.9) | 81(33.1) | 245(100.0) | * |
| 小学校2年 | 15(50.0) | 15(50.0) | 30(100.0) | |
| 小学校3年 | 144(57.8) | 105(42.2) | 249(100.0) | |

*：P<.05

学習塾等は1年生でも半数以上が通っており、学習塾以外のお稽古事は8割前後となる（表10）。

表10 習い事をしている子ども 人（学年全体に対する割合%）

| | 小学校1年 | 小学校2年 | 小学校3年 | 1年と3年の有意差 |
|----------------------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 学習塾に通ったり通信教育などを受けている | 147(52.1) | 18(54.5) | 176(60.1) | n.s. |
| 学習塾等以外のお稽古事をしている | 219(77.9) | 28(84.8) | 239(81.6) | n.s. |

「家で宿題や勉強を教えている」のは1年生と3年生では0.1%水準で有意差があり ($\chi^2(2)=51.40$)、1年生では4割の親が「ほとんど毎日宿題や勉強を教えている」が、小学校3年生になると1割台になる。2年生は4割近くが教えている (表11)。

「この子に教えることは楽しいか」については、「楽しい」「負担」「他」がほぼ3分する結果となっているが、2年生は「負担」とする比率が高い (表12)。

表11 家で宿題や勉強を教えている

| | ほとんど毎日 | ときどき | 教えていない | 人 (%) | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|-----------|---------|-------|-----------|
| 小学校1年 | 116(41.1) | 152(53.9) | 14(5.0) | *** | *** |
| 小学校2年 | 12(36.4) | 19(57.6) | 2(6.1) | | |
| 小学校3年 | 43(14.6) | 223(75.9) | 28(9.5) | | |

*** : P < .001

表12 この子に教えることは楽しいか

| | 楽しい | 負担 | 他 | 楽しい | 人 (%) | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|----------|----------|------------|-------|-----------|
| 小学校1年 | 116(44.1) | 73(27.8) | 74(28.1) | 263(100.0) | n.s. | n.s. |
| 小学校2年 | 9(30.0) | 12(40.0) | 9(30.0) | 30(100.0) | | |
| 小学校3年 | 92(36.1) | 88(34.5) | 75(29.4) | 255(100.0) | | |

(5) 心配事の相談

「心配事があったとき誰かに相談したか」では、1年生と3年生では5%水準で有意差があり ($\chi^2(1)=4.17$)、1年生の親の方が相談している人が多い (表13)。一方、相談しなかった理由は、「相談するほどではないと思った」が心配事のあった人の多くを占めるが、1年と3年では「相談して解決しないと思った」が1割台であるが、存在する (表14)。また、相談相手 (複数回答) としては7割が「夫」と応えているが、ついで学校の保護者、先生となっている。1年生では「以前の園の保護者」と答えている人も2割あり、幼児期のつながりが持続している人もいる。2年生は子育て相談機関や「他」としている人が他の学年に比べかなり多い (表15)。「他」の内容についての自由記述の分析を待たなければならないが、専門機関に相談する割合が高いのかもしれない。「先生に、子どもの様子や家庭からの要望が伝えられるか」については、8割前後

の人が「できる」と答えている（表16）。

表13 心配事があったとき誰かに相談したか 人 (%)

| | はい | いいえ | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 小学校1年 | 197(77.3) | 58(22.7) | *] |
| 小学校2年 | 28(87.5) | 4(12.5) | |
| 小学校3年 | 183(69.3) | 81(30.7) | |

* : P < .05

表14 心配事があっても相談しなかった人の理由 人 (%)

| | 相談するほどではないと思った | 相談することがはばかれた | 相談しても解決しなかったと思った | その他 | 1年と3年の有意差 |
|-------|----------------|--------------|------------------|---------|-----------|
| 小学校1年 | 38(71.7) | 1(1.9) | 8(15.1) | 6(11.3) |] n.s. |
| 小学校2年 | 4(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | |
| 小学校3年 | 51(76.1) | 1(1.5) | 12(17.9) | 3(4.5) | |

表15 相談相手（複数回答） 人 (%)

| | 夫 | 先生 | 以前の園先生 | 学校保護者 | 園の保護者 | 子育て相談機関1 | 他 |
|-------|-----------|----------|--------|-----------|----------|----------|----------|
| 小学校1年 | 144(73.1) | 80(40.6) | 8(4.1) | 114(57.9) | 43(21.8) | 8(4.1) | 52(26.4) |
| 小学校2年 | 19(67.9) | 13(46.4) | 2(7.1) | 14(50.0) | 2(7.1) | 3(10.7) | 9(32.1) |
| 小学校3年 | 139(76.4) | 69(37.9) | 8(4.4) | 93(51.1) | 25(13.7) | 9(4.9) | 44(24.2) |

表16 先生に、子どもの様子や家庭からの要望伝えられるか 人 (%)

| | できる | できない | どちらともいえない | 1年と3年の有意差 |
|-------|-----------|--------|-----------|-----------|
| 小学校1年 | 246(87.2) | 6(2.1) | 30(10.6) |] n.s. |
| 小学校2年 | 26(78.8) | 1(3.0) | 6(18.1) | |
| 小学校3年 | 240(81.6) | 7(2.4) | 47(16.0) | |

(6) 子育て支援ニーズ

「とても必要とする」人の割合が一番高いのは「子どもが安心して遊べる遊び場」であり、ついで「学校での様子をもっと知らせてほしい、「用事があるとき子どもを預かってくれるところや人」も、1、3年生でも4割前後はいる。「母親が子育てから離れてリフレッシュ」は、1年生と3年生では5%水準で有意差があり ($\chi^2(3)=10.19$)、1年生の方が多い。全体として2年生は支援ニーズがほとんどの項目で他の学年より高い（表17）。

表17 支援ニーズ（「とても必要とする」）

人（%）

| | 小学校 1年 | 小学校 2年 | 小学校 3年 | 1年と3年の 有意差 |
|-----------------------------|-----------|-----------|-----------|---------------|
| 子どもの育て方やしつけについて相談する人や機関 | 66(23.6) | 11(33.3) | 62(21.1) | n.s. |
| 子育てや教育の専門家の話を聞く機会 | 34(12.1) | 11(33.3) | 35(11.9) | n.s. |
| 用事があるとき子どもを預かってくれるところや人 | 128(45.4) | 18(54.5) | 106(36.1) | n.s. |
| 他の母親たちと交流していろいろ話を聞きたい | 60(21.4) | 8(24.2) | 50(17.0) | n.s. |
| 母親が子育てから離れて楽しんだりリフレッシュできる場所 | 120(42.7) | 13(39.4) | 88(29.9) | * |
| 子どもが安心して遊べる遊び場 | 237(84.0) | 28(84.8) | 229(77.9) | n.s. |
| 学校での様子をもっと知らせてほしい | 139(49.5) | 18(54.5) | 126(42.9) | n.s. |

*：P<.05

(7) 広汎性発達障害に関する点数分布

広汎性発達障害に関する質問項目の回答の点数は、表20のとおりである。得点が高いほど広汎性発達障害の傾向を強くもっていることを表している。小学校1年と3年では0点と1点の子どもがほぼ半数、6点以上の子どもが1割前後いる。小学校2年では、0点と1点の子どもが4分の1、6点以上の子どもは3分の1ほどいる。小学校2年では、に先に述べたように、健診事後のフォローアップグループ参加者や障害をもっている子どもが多く含まれているので、点数が高い子どもの比率も高くなっている。

表18 広汎性発達障害に関する質問項目

| |
|--|
| 他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている |
| 会話のしかたが形式的であり、抑揚なく話したり間合いが取れなかったりすることがある |
| とても得意なことがある一方で、極端に不得手なものがある |
| いろいろな事を話す、その時の場面や相手の感情、立場を理解しない |
| 友だちと仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない |
| 自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる |
| 独特な目つき、表情、姿勢をしていることがある |
| 順番を待つのが難しい |
| 友達のそばにいるが、ひとりで遊んでいる |

表19 学習障害に関する質問項目

| |
|-----------------------------|
| 指示されたことの理解が難しい |
| 思いついたまま話す等、筋道の通った話をするのが難しい |
| 音読が苦手（語句を抜かしたり、繰り返し読んだりする） |
| 読みにくい字を書いたり、漢字の細かい部分を書き間違える |
| 計算するのに時間がかかる |
| 早がてんや、飛躍した考えをする |

表20 広汎性発達障害に関する質問項目の合計点の分布

| 点 | 小学校1年 | | | 小学校2年 | | | 小学校3年 | | |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 人数 | % | 累積% | 人数 | % | 累積% | 人数 | % | 累積% |
| 18 | 0 | 0.0 | 0.0 | 1 | 3.1 | 3.1 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 17 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 3.1 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 16 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 3.1 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 15 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 3.1 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 14 | 0 | 0.0 | 0.0 | 1 | 3.1 | 6.2 | 1 | 0.3 | 0.3 |
| 13 | 1 | 0.4 | 0.4 | 0 | 0.0 | 6.2 | 0 | 0.0 | 0.3 |
| 12 | 3 | 1.1 | 1.5 | 0 | 0.0 | 6.2 | 2 | 0.7 | 1.0 |
| 11 | 1 | 0.4 | 1.8 | 0 | 0.0 | 6.2 | 0 | 0.0 | 1.0 |
| 10 | 1 | 0.4 | 2.2 | 2 | 6.3 | 12.5 | 1 | 0.3 | 1.4 |
| 9 | 4 | 1.5 | 3.7 | 2 | 6.3 | 18.8 | 3 | 1.0 | 2.4 |
| 8 | 8 | 2.9 | 6.6 | 2 | 6.3 | 25.0 | 6 | 2.0 | 4.4 |
| 7 | 3 | 1.1 | 7.7 | 3 | 9.4 | 34.4 | 8 | 2.7 | 7.2 |
| 6 | 14 | 5.1 | 12.8 | 0 | 0.0 | 34.4 | 10 | 3.4 | 10.6 |
| 5 | 10 | 3.6 | 16.5 | 2 | 6.3 | 40.7 | 13 | 4.4 | 15.0 |
| 4 | 16 | 5.8 | 22.3 | 2 | 6.3 | 47.9 | 29 | 9.9 | 24.9 |
| 3 | 28 | 10.2 | 32.5 | 5 | 15.6 | 62.6 | 22 | 7.5 | 32.4 |
| 2 | 42 | 15.3 | 47.7 | 4 | 12.5 | 75.1 | 51 | 17.4 | 49.8 |
| 1 | 49 | 17.8 | 65.5 | 4 | 12.5 | 87.5 | 61 | 20.8 | 70.6 |
| 0 | 95 | 34.5 | 100.0 | 4 | 12.5 | 100.0 | 86 | 29.4 | 100.0 |
| 合計 | 284 | 100.0 | | 32 | 100.0 | | 295 | 100.0 | |

表21 LDに関する質問項目の合計点の分布

| 点 | 小学校1年 | | | 小学校2年 | | | 小学校3年 | | |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 人数 | % | 累積% | 人数 | % | 累積% | 人数 | % | 累積% |
| 18 | 1 | 0.4 | 0.4 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 17 | 1 | 0.4 | 0.8 | 0 | 0.0 | 0.0 | 1 | 0.3 | 0.3 |
| 16 | 2 | 0.7 | 1.5 | 1 | 3.1 | 3.1 | 1 | 0.3 | 0.6 |
| 15 | 0 | 0.0 | 1.5 | 0 | 0.0 | 3.1 | 2 | 0.7 | 1.3 |
| 14 | 3 | 1.1 | 2.6 | 3 | 9.4 | 12.5 | 6 | 2 | 3.3 |
| 13 | 3 | 1.1 | 3.7 | 0 | 0.0 | 12.5 | 6 | 2 | 5.3 |
| 12 | 4 | 1.4 | 5.1 | 5 | 15.6 | 28.1 | 7 | 2.4 | 7.7 |
| 11 | 6 | 2.1 | 7.2 | 0 | 0.0 | 28.1 | 11 | 3.8 | 11.5 |
| 10 | 13 | 4.6 | 11.8 | 1 | 3.1 | 31.2 | 16 | 5.5 | 17.0 |
| 9 | 8 | 2.8 | 14.6 | 1 | 3.1 | 34.3 | 8 | 2.7 | 19.7 |
| 8 | 21 | 7.5 | 22.1 | 3 | 9.4 | 43.7 | 17 | 5.8 | 25.5 |
| 7 | 16 | 5.7 | 27.8 | 2 | 6.3 | 50.0 | 24 | 8.2 | 33.7 |
| 6 | 21 | 7.5 | 35.3 | 4 | 12.5 | 62.5 | 24 | 8.2 | 41.9 |
| 5 | 27 | 9.6 | 44.9 | 1 | 3.1 | 65.6 | 32 | 10.9 | 52.0 |
| 4 | 22 | 7.8 | 52.7 | 1 | 3.1 | 68.7 | 20 | 6.8 | 58.8 |
| 3 | 24 | 8.5 | 61.2 | 2 | 6.3 | 75.0 | 27 | 9.2 | 68.0 |
| 2 | 30 | 10.7 | 71.9 | 3 | 9.4 | 84.4 | 24 | 8.2 | 76.2 |
| 1 | 23 | 8.2 | 80.1 | 3 | 9.4 | 93.8 | 25 | 8.5 | 84.7 |
| 0 | 56 | 19.9 | 100.0 | 2 | 6.3 | 100.0 | 42 | 14.3 | 100.0 |
| 合計 | 281 | 100.0 | | 32 | 100.0 | | 293 | 100.0 | |

(8) 学習障害に関する点数分布

LDに関する質問項目の回答の点数は、表21のとおりである。得点が高いほどLDの傾向を強くもっていることを表している。小学校1年では約半数が3点以下、10点以上が約1割、小学校3年では約半数が4点以下、11点以上が約1割であった。小学校2年では、半数が6点以下で、10点以上が約3割いる。小学校2年ではやはり、点数が高い子どもの比率が高くなっている。

4. 考察

(1) 分析対象者の特徴

国勢調査や他の大規模調査に比べると、本研究の対象者は、母子家庭の比率がやや低いものの、その世帯収入や母親の就業状況においては、おおきな偏りはないと考えられる。

しかし、対象者は、これまで4回にわたるかなり分量の多い子育てに関する質問項目に毎回記入し、また毎回「次回調査に協力してもよい」と回答してくださる方であり、子育てについてまじめに取り組んでいる母親たちであるということが言える。このような多くの誠実な継続的回答者に恵まれていることが、著者らの調査研究にとっては非常にありがたいことであるが、結果を分析する際には、「(ある県の)母親たちの回答」ということではなく、「その中の子育てに比較的熱心な母親たちの回答という偏りがある」ということを念頭におく必要がある。

(2) 小学校移行期の子どもの変化と親の対応・不安

9割前後の親が「子どもが入学して成長した」と答えており、小学校入学が発達の前進的な節目であると受け止められている。1年生時点では3年生よりも子どもの宿題を見たり、懇談会に出席したり、懇談会が有意義であるとする比率が高く、親としても子ども自身やその学校生活へのかかわりを高める質的転換期であるといえるのではないだろうか。

しかし、他方では1年生の2割の親が「先生の対応」や「勉強面」で入学前の子想と異なっていたと答えており、また子どもの学校生活への不安を持っているひとかなり多く、3割が「子どもが勉強についていけないのでは」「友達

にいじめられるのでは」と心配しており、これは3年生でも同様である。

「予想との違い」はプラス方向と逆方向のものがあると思われ、自由記述の分析を行う必要があるが、この時期は子どもにとってだけでなく親にとっても喜びと不安の大きい質的転換期であるといえよう。

(3) 本調査対象児の軽度発達障害の疑いのある子どもたちの存在

文部科学省の調査では27項目の評点の合計が22ポイント以上（最高54ポイント）の児童生徒を、小中学校の通常学級における「対人関係やこだわり等」の問題を著しく示す児童生徒としてピックアップした結果、該当する子どもの比率は0.8%であった。また、愛知県教育委員会が2005年度に実施した同様の調査によると、高機能自閉症と考えられる子どもの比率は小学校の通常学級で0.48%であった。そのポイントの基準と同じ比率で本調査結果の18満点中7点以上のケースをみると、その比率は小学校1年生の7.7%、小学校2年の34.4%、小学校3年の7.2%であった。文部科学省の調査に比べると1年生、3年生も高い比率となっているが、本調査の対象児には、2、3歳の時期に診断を受けた自閉症の子どもも含まれており、通常学級の在籍児に限定していないことにもよると考えられる。

参考までに、文部科学省の調査では、LDに関する質問項目の6つの領域の内、少なくとも一つの領域で該当項目が12ポイント以上（最高15ポイント）の児童生徒を、小中学校の通常学級における学習面で著しい困難を示す児童生徒として把握したが、その割合は、4.5%であった。また、愛知県教育委員会が2005年度に実施した同様の調査によると、LDと考えられる子どもの比率は小学校の通常学級で0.52%であった。宮本正一の同様の調査¹³⁾によれば、LDの疑いがあるとされる小中学校の児童生徒は2.7%（男子3.55女子1.9%）であった。

今回、広汎性発達障害や学習障害に関する質問項目の回答の得点の分布を示したが、何点以上が、その障害の疑いがあるといえるのかはまだ明確ではない。障害を診断されている対象児の点数の分析、CBCLの注意の問題に関する質問項目の回答との関連等を今後検討していきたい。またそのような障害のリスクをもった対象児の親の子育て不安、子育て状況、支援ニーズを分析していきたい。

(4) 2年生群の回答の不安感、支援ニーズの高さの特殊性

本研究においては、今回の調査で2年生となった子どもたちは前述のように多くが1歳半健診後のフォローアップ児群であり、病気や障害を持っている子どもの比率が高い。2年生は人数が少ないため他の学年と有意差検定をすることはできないが、子育て不安や学校関連の不安も高く、子どもに勉強を教えることの負担感、支援ニーズが高い傾向が窺われる。

このことから、子どもの病気や障害(軽度発達障害も含め)と、親の子育て不安や学校関連の不安・負担感、支援ニーズの関連が示唆される。

(5) 今後の分析課題

上記のように、学校段階において、子どもの個性とりわけ軽度発達障害に関連のある特徴を持つ子どもの親の子育て状況や不安、ニーズなどの関連を明らかにすることが必要である。

また、6年間にわたる縦断的データをもとに、小学生のときに学校や家庭で困難を抱える子どもたちの、乳児期の特徴や親の意識などとの関連について縦断的に分析することにより、障害の早期発見や早期支援を行うための基礎的な知見を生み出すことができるであろう。

縦断研究の手法について西條は、縦断データに適した分析法として、高度な統計的手法と並んで、質的記述の重要性を指摘している¹⁴⁾。特に困難を抱える子どもについて、ケーススタディー的に6年間にわたる回答内容を自由記述も含め丹念に追っていくことによって、このような子どもの育ちの中で、どのような時点でどのような支援が必要かを具体的に示していくことができると思われる。

以上今後の課題としたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究(基盤研究C、平成18年度～21年度、課題番号18530760)「幼児期に多動・衝動的傾向を示す子どもの学童期における問題と支援に関する縦断的研究」(代表;神田直子、共同研究者;山本理絵、伊田勝憲、小淵隆司、石野陽子)によるものである。

（注）

- 1) 筆者らは「子育てを母親のみ」に負わせることには反対の立場にあるが、調査実施にあたっては、回答者のほとんどが母親であるため、質問項目設計および分析の便宜のため、調査対象者を母親のみに限ることとした。
- 2) 神田直子、山本理絵（2001） 子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方 愛知県立大学児童教育学科論集 35号、21～42
- 3) 山本理絵、神田直子（2003） 子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方（Ⅱ）－「育児不安」と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に－ 愛知県立大学児童教育学科論集 36号、39～54
- 4) 山本理絵、神田直子（2003） 育児期の困難さに応じた子育て支援 季刊保育問題研究 201号、126～140 新読書社
- 5) 神田直子、山本理絵（2004） 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント－1歳から4歳の発達の変化－ 愛知県立大学児童教育学科論集 37号、31～40
- 6) 神田直子、山本理絵（2005） 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント（3）－1歳から6歳の横断的分析および3年間の縦断的分析より－ 愛知県立大学児童教育学科論集 38号、1～12
- 7) 山本理絵、神田直子（2005） 子どもの「育てにくさ」と育児不安・マルトリートメント（2）－4歳児と6歳児を中心に－ 愛知県立大学文学部論集、児童教育学科編 53号、33-56
- 8) 石野陽子（2007） 母親が子どもに抱く罪障感の心理学的研究 風間書房
- 9) 中田洋二郎、上林靖子、福井知美（1999） 幼児の行動チェックリスト（CBCL/2-3）の標準化の試み 小児の精神と神経 39号 4号、317～322
- 10) 根来あゆみ、山下光、竹田契一（2004） 軽度発達障害児の主観的育てにくさ感－母親への質問紙調査による検討 発達 97号、13～18 ミネルヴァ書房
- 11) 別府哲、奥住秀之、小淵隆司（2005） 自閉症スペクトラムの発達と理解 全障研出版部
- 12) 文部科学省（2003） 『『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査』調査結果』
- 13) 宮本正一（2005） 軽度発達障害児の判断ソフト
<http://www1.gifu-u.ac.jp/~gupsycho/miyamoto/05312manual.pdf>
- 14) 西條剛央（2001） 縦断研究のための土壌創り：「縦断研究法」の体系化に向けて 発達心理学研究 12巻3号、242～244